

サヘル・ローズ



S a h e l R o s a

女優

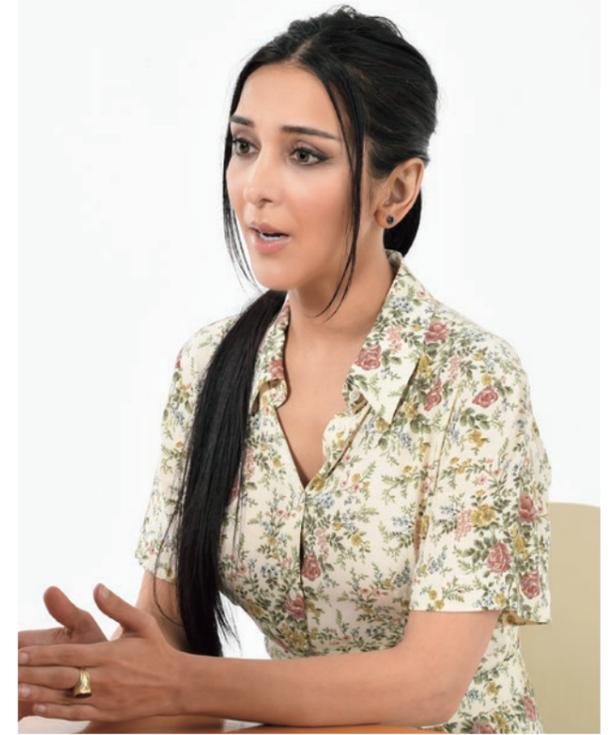
失った「自分らしさ」を取り戻せたのは恩師のおかげ。

顔で笑って心で泣いていた  
イランでの幼少時代

1985年、私はイラン・イラク戦争の真ただ中にイランで生まれました。多く子どもたちがそうであったように、私も戦争孤児として4歳のときに児童養護施設に入ったんです。施設の職員さんからは「新しい親に気に入ってもらえるよう、いつでも笑顔でいなさい」と言われながら、日々を送っていました。だから、どんなに泣きたいときでも、大人の前では笑うようにしていたし、自分の欲求はすべて押し殺して、物分りのいい子どもを演じていたと思います。不安なときにギュッと抱きしめてくれたり、泣いているときに優しく背中をさすってくれる親が欲しかった。それに、年を重ねるごとに養子縁組のチャンスが減っていくのを理解していたこともあって、7歳になった私はすでに不安で仕方なかったんですね。そんな私を引き取ってくれたのが、今の母です。その当時、母は大学院で心理学を学んだ後、ボランティアで心理カウンセラーをしていました。初対面の際、私は彼女を「お母さん」と呼んだらしく、そのときに母は「この子を養子にする」と決心したそうです。母に初めて抱きしめられたときに胸いっぱい吸い込んだ、母がつけていたジャスミンの香水の香りと、体も心も丸ごと包んでくれた温もりは、今でもよく覚えています。

来日後まもなく  
生活の場は公園に…

私を引き取った当時、母は25歳でイラン人の夫がいました。彼は単身で日本に渡り、空手の先生をしていたため、私の第二の人生は母と二人で始まったんです。自分だけの部屋や新しい服など、施設では手に入らないものを与えられ、幸せな毎日ははずでした。ところが、母は朝から晩まで仕事。その間、私は家で一人ぼっち。次第に施設でのにぎやかな生活が恋しくなり、私は「施設に戻りたい」と言って母を困らせたそうです。また、私を連れて外出をすると、私の言葉遣いやマナーがなかったせいで、周囲から眉をひそめられ、母はそれを私に感じさせないよう苦労したと後から聞きました。それで、母は夫がいる日本で子育てをしたほうが私のためになるのではないかと思い始め、1993年に私を連れて来日したんです。私は埼玉県の公立小学校の2年生に転入するも、来日して



まもなく、母は夫の暴力から逃れるために、私を連れて家出。約2週間、公園に寝泊まりしながら、私は公園から学校に通いました。親切な人たちの助けもあって、路上生活から抜け出すことはできたものの、日本語が分からない、見るからに外国人の私たち親子は、毎日を生きるのに必死でした。

自殺を決意した日に  
「生きよう」と思い直した

小5のときに都内へ引っ越し、学校も変わったのですが、小5にもなると人間関係が出来上がっていて、そこに転校生が、ましてや外国人が溶け込むのは至難の業なんですね。加えて、その当時はイラン人による犯罪が度々ニュースになっていて、私へのいじめが始まりました。私や母に対する誹謗中傷、無視、ばい菌扱い。それは中学校に進学してからも続き、私の心には常に何本ものナイフが刺さっているようでした。先生に相談しても解決には至らず、ひたすら耐える日々。心を許せる母はいたけれど、母には心配をかけたくないため、母に相談するという選択肢はありませんでした。そして、心が完全にパンクしてしまった中3のある日、自殺をしようと思い、学校を早退して家に帰ると、仕事でいないはずの母が家にいて泣いていたんです。母も職場では孤独で苦悩の毎日だったんですね。そんな母の前に、私は「生きよう。生きて母に恩返しをしよう」と思い直すことができました。いじめに耐えるのに精一杯で、成績は最悪でしたが、何とか都立園芸高等学校の定時制に入学し、高校で猛勉強の末、大学に

進学することもできたのです。

## 「人」と「人」として 私に寄り添ってくれた恩師

いじめを経験した私が言えること。それは、学校の先生方には「先生」と「生徒」の関係ではなく、「人」と「人」として向き合っていただきたいこと。そして、先生に相談をする時点で、その子は十分に頑張っているし、切羽詰まっているので、どうか「頑張れ」と「様子を見よう」という言葉は使わないでいただきたいんです。私は高校時代に、持田先生という素晴らしい恩師に恵まれました。高校入学後、私は「個性を消して、何でも周囲に合わせていけばいじめられない」と思っていたんです。そんな私に持田先生は「友達は数じゃない。1人の親友を得ることは奇跡。その奇跡を起こすためには『自分らしさ』を出さないとダメよ」と優しく諭してくださいました。持田先生との交流は今も続いています。

私はプライベートで児童養護施設の子どもたちを支援しているのですが、多くの子どもたちが「学校の先生が助けてくれた」と話してくれることを、とてもうれしく思います。そして、今の私があるのは教育を受けたおかげなので、中東の子どもたちが教育を受けられるよう、学校建設の活動も頑張りたい。私の発信力を高めるには、サヘル・ローズという名前にもっともっと力をつけたいので、芸能のお仕事にも全力で臨みます。2021年は1月からNHK『アラビヤ・シャベリーヤ！ ～エジプト編～』に出演しますので、興味のある方はぜひご覧くださいね！



2019年に訪れたヨルダンにある世界最大のシリア難民キャンプ(ザアタリ難民キャンプ)にて。「憎しみからは何も生まれません。負の連鎖を止めるためにも、私は子どもたちに銃ではなくペンを持ち、学校で学んでほしいです」(サヘルさん談)。

### サヘル・ローズ (さへる・ろーず)

1985年イラン生まれ。8歳で来日。日本語を小学校の校長先生から学ぶ。舞台『恭しき娼婦』では主演を務め、主演映画『冷たい床』では、ミラノ国際映画祭で最優秀主演女優賞を受賞するなど映画や舞台で、女優としても活動の幅を広げている。第9回若者力大賞を受賞。芸能活動以外にも、国際人権団体NGOの「すべての子どもに家庭を」の活動で親善大使を務めている。最近では、さまざまな国へ行き、子どもたちへの支援や、青空教室などを行っている。

わたしの  
イチオシ!



🎀 クイズ(P27) 正解者の中から抽選で1名様に、サヘル・ローズさんオススメ、かつお節とだし素材の専門店「かつをぶし池田屋」の「食べる削り節」ほかをプレゼントします。  
ふるってご応募ください!

### わたしの心にある風景



### 【見上げたときの空】

空が大好きで、空を見上げてはよく写真を撮るんです。施設にいたころも、お気に入りの場所は空が見える広場でした。青空も、雨が降る空も、夕焼けの空も、見上げればいつだって、空が私をいろんなものから解放してくれて、本来の私に戻してくれます。私はガーデニングも好きで、今、天王洲アイルにあるお庭で130種類以上のバラを育てているのですが、バラも空を見上げながら花を咲かせるんですよ。私もバラを見習いたいですね。バラのお庭を持つことは母の夢でもあったので、ようやく少しか母に恩返しのできたかなって思っています。